

hap·py

→ go

→ luck·y

【ハッピー・ゴー・ラッキー】

形 〈人の行動が〉のんきな、気楽な。

名 10代におくるブックガイド。

はぴ



号

2010年10月発行

【編集・発行】

さいたま市立中央図書館

さいたま市浦和区

東高砂町 11-1

TEL 048-871-2100

FAX 048-884-5500

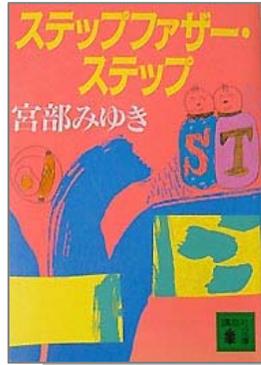
HP <http://www.lib.city.saitama.jp/>

携帯HP



家族ヲ読ム

2010
国民読書年



『ステップファザー・ステップ』

宮部みゆき作 講談社文庫 1996年

雷が鳴る夜、プロの泥棒が屋根から落ちてしまった！目が覚めると、そこは双子の中学生が住む家だった。二人は泥棒に「僕ら二人くらい、面倒みられない？」と、意外な提案をする。なんと双子の両親はそれぞれ駆け落ちしてしまったらしいのだ。

指紋をとられ、はじめは渋々父親を演じる泥棒。一方で泥棒を「お父さん」と呼んで慕う兄弟。一緒に過ごすうちに、泥棒の心の中で兄弟の存在が大きくなっていく。次第に兄弟の実の親のことが気になってきた泥棒は…。果たして三人は父子の絆を手に入れることができるのだろうか？



『リリース』

草野たき作 ポプラ社 2010年

中学2年の明良(あきら)は自分が生まれた日に父を亡くし、今は大学生の兄と母との3人暮らし。父と同じバスケット部に入り、父と同じ医者を目指す。今までは、そうやって周囲の期待に応え、父と同じ道を生きることにならに満足していた。けれど、いつしか、彼は自分が本当にやりたいことに気づいてしまう。

仲は良いがバスケットが下手な部員たち、協調性ゼロの転校生・小杉、兄の秘密を知っているという篠原真由。そして、祖母や兄や母。そんな周囲の誰かのために、自分はずっと我慢してきたと思っていた明良が、家族や友達の本当の気持ちを知り…。



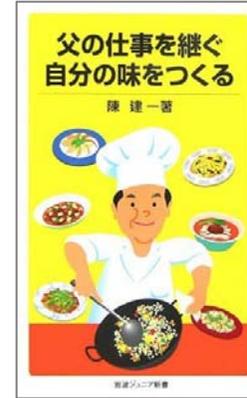
『大草原の小さな家』

ローラ・インガルス・ワイルダー作 恩地三保子訳 福音館文庫 2002年

チャールズとキャロラインの夫婦は3人の幼い娘を連れて、ウィスコンシン州の住み慣れた小さな家を後にした。馬車に乗り一家が目指すのは、未開の原野が広がるインディアン・テリトリー。

大草原の新たな地に、チャールズは切り出してきた丸太を重ねて家を立て、石を積み重ねた暖炉を作る。家族の他には頼る者もない自給自足の日々。やがて開拓者やインディアンが現れ、一家の暮らしに変化が訪れる。

19世紀半ばのアメリカ西部開拓期を背景に、一家が困難を乗り越えて住み心地の良い家を作り上げる。少女期のローラの体験をもとにした自伝的物語。



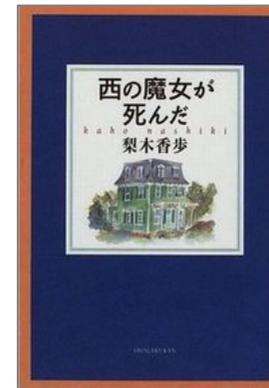
『父の仕事を経る 自分の味をつくる』

陳建一作 岩波ジュニア新書 2006年

四川料理を日本にはじめて紹介し「中華の神様」と呼ばれた陳建民。そんな偉大な父を持った息子・陳建一が子供時代から現在までを語ります。

父と同じ味を作りたいと励んだ修業時代、どんな料理を作っても父と比較されてしまう二代目の苦悩、父の跡を継ぎ四川飯店のトップに立つことのプレッシャー。けれど、彼はどんなときも仕事への情熱を失わず、父という大きな壁を乗り越え、自分の味を極め、料理人としての道を歩き続けます。料理を食べた人も料理人も幸せになれる中華料理を作ることを目標として。

巻末には作者の特製中華料理レシピ付き。



『西の魔女が死んだ』

梨木香歩作 小学館 1996年

中学校に入ったばかりのまいは、ぜんそくの発作をきっかけに学校に行かなくなった。学校はまいにとって「苦痛を与える場」だったからだ。そしてしばらくの間、イギリス人のおばあちゃん「西の魔女」と一緒に暮らすことになる。

まいは、おばあちゃんと一緒に摘み取った野いちごで砂糖がいっぱい入ったジャムを作ったり、たらいを使った洗濯や鶏の世話などをする。そこには、昔の人たちのように、自然とともにある暮らしを大切にしている生き方があった。まいは、大好きなおばあちゃんと一緒に過ごしなが、魔女になるための修行を受ける。



『“It(それ)”と呼ばれた子』

デイヴ・ペルザー作 田栗美奈子訳 青山出版社 1998年

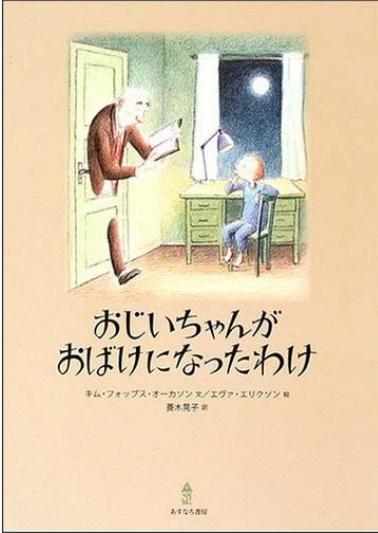
僕がずっとずっと幼かった頃、僕の家族はホームドラマに出てくるような仲の良い一家だった。けれど、やさしかった母さんは突然変わってしまった。兄弟の中で僕だけが名前を呼んでももらえない、食べものをもらえない、時間内に手伝いが終わらないとぶたれる、寝るのはガレージ…。いつしか兄弟からも邪険にされ、唯一の味方だったはずの父さんは家に帰ってこなくなった。

そしてついに、僕の呼び名が“あの子”から“それ”に変わった。僕は人間以下なのだ…。

アメリカで実際に起こった虐待の犠牲者が自らつづった、自由を勝ち取るまでの真実の記録。

【もっと！「家族」の本】 ◆ぶらんこが上手で動物とはなしができる弟が残したノートを元に姉が思い出を語る『ぶらんこ乗り』(いしいしんじ作 新潮文庫 2004年) ◆下町で代々続く古書店を営むワケあり大家族・堀田家が舞台の連作短編『東京バンドワゴン』(小路幸也作 集英社 2006年) ◆作家・椎名誠がわんぱくな長男・岳との日々をつづった私小説『岳物語』(椎名誠作 集英社文庫 1989年) ◆のんびりやの女子高生・雛子としっかりものの弟・真人の日常を淡々と描く『宙(ソラ)の家』(大島真寿美作 角川文庫 2006年) などなどアリマス。

ほんの
ひととき。



おじいちゃんがおばけになったわけ

キム・フォックス・オーカソン著 エヴァ・エリクソン 絵
菱木晃子 訳



「この世にわすれものがあると、人はおばけになる」

亡くなったはずのおじいちゃんが、夜エリックの部屋にやってきた。なんと、おばけになって！

わすれものをさがし、おじいちゃんとエリックは夜中の街を歩き回る。

若い時のこと、エリックと過ごした楽しい時間…。そして、おじいちゃんが思い出した大切なこととは？

心温まるラストシーンが印象的です。

『おじいちゃんがおばけになったわけ』

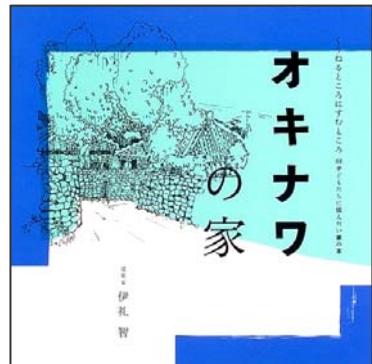
キム・フォックス・オーカソン作 エヴァ・エリクソン絵 菱木晃子訳
あすなろ書房 2005年

家族と読書と“テゲーライフ”

忙しい毎日だからこそ、家族とともに家で過ごすゆったりとした時間は、何ものにも代えがたいもの。さらに快適で、気持ちのよい住まいならなおさらですね。

この本では、沖縄出身の建築家が、暑い日差しや湿気と共存する知恵がつまった家や、沖縄らしいテゲー(適当)なゆったりした暮らし、伝統と現代、それぞれのよさを取り入れた新しい家作りなどを紹介しています。

秋の夜長、この10号“家族本”で読書にひたりながら、家族と一緒にゆったりテゲー気分を味わってみてはいかが？



『オキナワの家 くうねるところにすむところ 03』

伊礼智作 インデックス・コミュニケーションズ 2004年

次回
予告

11号(1月発行)のテーマは「才能」



このブックガイドは2000部作成し、1部あたりの印刷経費は3円(概算)です。